

音楽の神様エルメート・パスコアルを調べて

はじめに

ブラジルが誇る鬼才エルメート・パスコアルの音楽に私自身が実際に生で触れて、今年でちょうど8年になる。そして、併行して私個人が収集している彼に関するレコードやCD、書籍、楽器や楽譜は優に100を超える。それらのコレクションの中で、特に私が興味深く思ったものが、日本語で書かれたエルメートにまつわる過去の書籍や資料である。そのような過去に日本人の評論家の方々が残してくださった論文・論考などの資料を、今再び改めて公開することも大切な使命であると感じ、今回この場で紹介させていただきたいと思う。資料はあくまでも私が現在所有している書籍類に限られるので、未だ紹介できないものが存在することをご理解いただいた上で、ご笑覧いただければ幸いである。

1. 1979年7月の初来日以前の資料

私が現在見つけることのできるエルメートに関する最古の記事は、1972年11月に発売されたスイングジャーナル（株式会社スイングジャーナル社）においてである。この頃のジャズシーンでは、アイルト・モレイラ、フローラ・プリン夫妻がアメリカジャズを席卷し始めたころ（当時のブラジル音楽の台頭ぶりは記事に出てくる JAZZ NOVA という言葉からも感じとれる。）で、彼らの師ともいえるエルメートが彼らの活躍を通してクローズアップされ出したことはごく自然なことと言える。この号では、『ジャズ・ノヴァの源泉を探る』という記事の中の“エルメート・パスコア（パスコアルのこと）とその背後の音楽”なる項で、評論家の大島守氏が「エルメートはシブーカと同じアルビーノ（白っ子）ミュージシャンとして知られているがレシーフェにいたころ一緒に楽団を結成していたそうである。ピアノ、オルガン、フルート、ギター、アコーディオンなどなんでもこなしてしまう人だが、あらゆるブラジルの打楽器の演奏も可能でその作曲にもすばらしい才能が秘められている。（以下中略）彼の作曲にはペルナンブーコ州、特にレシーフェ市の名物として知られているマラカッター（バイオンの原型）やその変形のリズムがよく使われており、独特のリズム感がアフロ・ブラジル風の香りをただよわせている。演奏についてもブラジル人としては抜群の感覚をもっており、セルジオ・メンデスやタンバ・トリオのルイス・エサといったピアニストがなしえなかったジャズへのアプローチが感じられる。アコースティック、エレクトリックいずれのピアノから生まれるアドリブも、マッコイ・タイナー

からチック・コリアにもとづくものを自分なりに消化したもので、無意識のうちにブラジル音楽がもっている多くの音楽的な要素が現れてくることを感じさせる。」と評されている。

翌年の1973年3月に発売されたスイングジャーナルの表紙はアイルト・モレイラが飾っており、当時の彼の八面六臂の活躍ぶりを物語っている。その号の中で『すばらしきジャズ・ノヴァの2人 エアート（アイルトのこと）とフローラにきく』なる記事が掲載されており、評論家の大島守氏がアイルト夫妻にインタビューをして記事を書いておられる。その中の“アイルトとエルメットとの出会い”なる項で、「アイルトの話では『恐らく世界中のジャズ・ピアニストで彼ほど多才な人は絶対にいない』という。しかし人間には欠点があるもので、絶対に大衆と妥協せず、あらゆるコンサート、レコーディングなども人の意見はとり入れないという。アイルトはアンペックスのブッダ・レコードに2枚のエルメットとの競演のアルバムをレコーディングしている。（「ザ・ナチュラル・サウンド・オブ・アイルト」「エルメット」）、この時エルメットと意見が合わなくて、大変苦勞したそうだが、もしエルメットのいうとおりレコーディングをしたら1枚も売れないだろうと思ったそうだ。（以下中略）ブッダ・レコードではアイルトの意見を取り入れたエルメットだったが、その後あまりにも音楽的な夢を追いすぎ職を失ってブラジルに戻ってしまった。昨年（1972）の10月20日からサンパウロのサンバのナイト・クラブ「ジョグラール」にエルメットが出演するという新聞を読み、ちょうど現地にいた私は予定を変更してその日を待たしたが彼はついに現れなかった。人の話ではリオとサンパウロの間の小さな村で1人っきりになってピアノを弾きつづけているという。しかしアイルトの成功の陰にはエルメットの音楽的な影響を見逃すことはできないのである。」

エルメート・パスコアルが日本の地に初めて降り立ったのは、1979年7月25日から5日間開かれたライブ・アンダー・ザ・スカイ '79に出演した時のことである。このイベントでは、25日と29日の二日間に登場した。1979年5月発売のスイングジャーナルには、ライブの広告が掲載されているが、料金はA席3000円、B席2500円、5日間通し券は15000円だった。特筆すべきは、「通し券をお求めの方には豪華プログラムを進呈！！」とあることだ。その豪華プログラムには、出演アーティストの紹介などの詳細が記載されていてすこぶる興味深い。そこでは、「かの帝王マイルス・デイビスを震撼せしめた奇才ミュージシャン、エルメート・パスコアルが9人編成のバンドを率いてやってくる。」と書かれていて、ライブへの相当な期待ぶりがうかがえる。また、そのスイングジャーナルには、エルメートと同じくブラジルが生んだ天才アーティスト、エグベルト・ジスモンチの記事が1ページ掲載されている。そこでは、彼にインタビューを行った上田力氏が以下のように書いている。「現在、自身で最高に評価しているのが日本では知名度の低いエルメート・パスコアルだそうだ。」このことから、エルメートと共にブラジルが誇る鬼才中の鬼才と並び称されるジスモンチが、エルメートを心底リスペクトしていることが見てとれる。また、来日前のエルメートの知名度が予想以上に低かったことも感じられてすこぶる興味深い。ちなみに、現在私のコレクションの中には二人の共演作が二

枚ある。一枚はジスモンチに招かれてエルメートが参加したジスモンチの1980年作のCIRCENSEと、アメリカのヴィヴラフォン奏者カル・ジェイダーと共演した1975年作AMAZONASである。また、来日直前のスイングジャーナル1976年7月号では、“ブラジリアン・フュージョンの新しい展開”として、山口弘滋氏がブラジル音楽の台頭ぶりを書いておられる。その中で、「フローラ・プリム、アイアート・モレイラらの諸作を通じて知られるブラジルの大物ミュージシャンの一人。エルメート・パスコール(key, g, reed)。マイルスとも共演した鬼才だ。」とエルメートの才能を賛美している。また、同号では“ブラジルフュージョンのスーパースターたち”というタイトルで、上田力氏が写真付きでエルメートのことを、アイアート・モレイラ、エグベルト・ジスモンチ（ここではジスモンチと書かれている）、ミルトン・ナシメント、ジルベルト・ジルらと共に紹介。ここで、「日本ではリーダー・アルバムが紹介されていないのであまり知名度が高いとはいえないが、アイアートとは密接な関係にあるのがこの人だ。（以下中略）エルメートの出生その他についての具体的なデータは明らかではないが、写真などで見る白い長髪は生まれながらにアルビーノ（日本では俗に白っ子などとも呼ばれる、先天的に色素のない人のこと）だからで、見かけほどの年齢ではないのは確かだ。（以下中略）シブーカはエルメートのことを“現代のベートーベン”と呼んでいるようだ。二人は大の親友でレシーフェ時代は一緒に楽団もやっている。エルメートはその頃からキーボード、ギター、フルート、そしてあらゆるブラジルの打楽器の演奏に長じていたのはもちろん、作曲面でも抜群の才能をひらめかせていたそうだが、それは現在の活躍からも十分想像できるところだ。（以下中略）アイアートのほかにもアメリカでの音楽活動をエルメートによって助けられたブラジルのミュージシャンは多く、その意味では年齢以上に長老的な役割を果たしているようだ。」と書かれている。また、同ページで同じくスーパースターと絶賛されるジスモンチについても『あなたが最も強く影響されたブラジルの音楽家は誰か』という質問に対して『もうこれ以上の人はいないと思うくらい好きなのがエルメート・パスコールだ。』と答えている。」と紹介。また、次ページの“多彩な活動をみせるその他のミュージシャン”の項で、アイアート・モレイラ夫妻についても書かれている。そこでは「(渡米) 当時アイアートにはほとんど仕事らしいものがなく、フローラの歌とギターによって養ってもらうような状態がしばらく続いたという。この間の面倒をみてくれたのがエルメート・パスコールで、親友のシブーカがミリアム・マケバの仕事をしていた関係で、そのショーの前座をつとめたのがフローラの最初の仕事だったらしい。」と書かれている。また同号では、“ライブ・アンダー・ザ・スカイ最終プロ決る!” という項で、5日間の出演予定が記載されている。「7月25日(18:00~) = エリス・レジーナ・グループ、エルメート・パスコール・グループ、渡辺貞夫、26日(18:30~) = V. S. O. P、27日(18:30~) = チック・コリア・グループ、28日(18:30~) = チック・コリア~ハービー・ハンコック・デュオ、29日(18:00~) = 渡辺貞夫、エルメート・パスコールとオールスターズ。」これを見るだけでも当時のライブへの大きな期待と周囲の興奮ぶりが伝わっ

てくる。

1979年7月に発売された中南米音楽（中南米音楽）では、来日直前の熱気が伝わってくるような内容となっている。その中の野口久光氏による項『天才的マルティ・インストルメンタリストエルメート・パスコアル ジャズに大きな影響を与えるモダン・ミュージックの巨匠』で、「愛弟子のひとり、フローラ・プリムはパスコアルについてこう語っている。『エルメートは、マイルス・デーヴィス、アイルト・モレイラ、キャノンボール・アダリー、デューク・ピアソン、ハービー・ハンコック、ギル・エヴァンスといった人たちのインスピレーション源になっている偉大な音楽家です。そして私にとっても新しい音楽的な視野を拓き、心を開いてくださったのがほかならぬエルメートなんです。彼が独創的で、誰ともちがった点は、音楽のジャンル、枠にこだわらず、すべての音楽への関心を持ち、新しい実験に挑む勇気を持ち、それを実行してきたことでしょう。エルメートに対する私の気持ちは、感謝あるのみ、と申し上げます』と。フローラのご主人アイルト（アイアートとはアメリカ式の発音らしいが）はパスコアルについてただ一言。『彼は、私がこれまでに会った誰よりも最も完璧な音楽家です。天才といってもいい人だと思います』と。このアルバムに入っている「ジャスト・リッスン」と題するピアノ・ソロがまたすごい。作曲家やいや音楽家として既成の形式や概念にこだわらない自由で大らかなパスコアルの音楽の魅力があふれている。時に南アメリカ出身のダラー・ブランドのピアノを彷彿させるかとおもうと、ガーシュインの自作自演をきいているように感じられるところもある。終わりの方で突然急速なピアノのフレーズに合わせて歌い出す彼、それはユーモアともいえずらともとれるが、彼の音楽の一部になっているからたのしい。数年前、彼はアメリカでピアノ・コンサートをやったことがあるが、その時客席にギル・エヴァンス、マイルス・デーヴィス、ウェイン・ショーター、ジョー・ザヴィヌルといった大物の顔がみえたという。実際。七〇年代のジャズのリーダー・シップをとってきたチック・コリア、ハービー・ハンコック、ショーター、ザヴィヌルの《ウェザー・リポート》、ギル・エヴァンスなどのコンセプトにはパスコアルの音楽が直接、間接に多大な影響を与えていることが、彼のアルバムをきいているとうなずけてくるのである。（以下中略）エルメートの来日によって、わが国のラテン・ファン、ジャズ・ファンのブラジル音楽に対する認識は一変することであろう。」

1979年8月に出されたスイングジャーナルでは、青木啓氏によって、アルバム、スレイブス・マスのディスクレビューが紹介されている。この記事が書かれた時は未だ来日前のようで、ライブへのさらなる期待ぶりもうかがえる。「7月下旬の『ライブ・アンダー・ザ・スカイ '79』にエリス・レジーナたちと参加するエルメート・パスコアルのリーダー・アルバム。彼はブラジルが生んだ天才とも鬼才ともいべき音楽家で、今年43才。ブラジル音楽を核としてあらゆる音楽を吸収し、自己の音楽をクリエイトしてゆく彼は、モレイラ夫妻をはじめ多くの人々に影響を及ぼしており、その人々から精神的指導者としても敬愛されている。また、ウェイン・ショーターそのほかのジャズメンにも多大な影響

を与えた大人物だ。」

来日記念盤として出されたアルバム、スレイブス・マス（ワーナー・パイオニア株式会社）のライナーを見ていると、まだ見ぬ巨人への期待感が伝わってくる。このエルメートの初の日本盤の中で、音楽評論家としてあらゆる音楽ファンに知られる中村とうよう氏が、エルメートについて以下のように書いておられる。「エルメート・パスコアールは、極めて不可思議な人物であり、驚嘆すべきミュージシャンであり、疑いなく天才である。1979年7月に来日すれば、ステージでその一端を見せつけてくれるに違いないが、ぼくがこれを書いている時点ではレコードから想像するしか手だてはない。こういうスケールの大きい音楽家はなかなかレコードでは真価が発揮しにくいのだが、このワーナー盤はかなりエルメートの天才ぶりをうかがわせる出来だ。」「ブラジル出身のエルメートは、いまアメリカに住んでいる。アメリカでは多くのミュージシャンがエルメートを敬愛し、評価しているようだが、エルメートはまだあまり有名ではない。こんにちのような音楽界の情勢では、エルメートは有名になるには才能がありすぎるのだ。」

また、同じLPで中村氏と共にライナーを執筆した野口久光氏は、「このLPをきいて筆者は、パスコアールという人の天衣無縫の才能、ゆたかな音楽性、大胆な音楽的構想が新鮮で強烈な演奏そのものの魅力に酔わされ、圧倒されている。」「パスコアールの出現と活躍はブラジルという国が現在も、これからも世界のジャズ界に最もインフルエンシャルなスポットであることを物語っている。」「その風貌や天才ぶりからであろう、ブラジルでは彼を『原始人』『ジャングルの男』『謎の人』『神秘的な人物』『民族音楽の英雄』などと彼は呼ばれているというが、こうした呼び名、愛称からもある程度、パスコアールの天才、人間像がうかがえよう。」「エルメートがニューヨークで行ったピアノ・コンサートには、マイルスやキャノンボール・アダラー、ギル・エヴァンス、デューク・ピアソン、ハービー・ハンコックの顔がみえたという。」などと書かれている。

2. 1979年7月の初来日後の資料

2008年3月末に私がエルメート本人に会った時に確認したことであるが、エルメートは初来日時に二社のインタビューに答えたという。スイングジャーナル1979年9月号では、来日後の印象やライブ・アンダー・ザ・スカイの感想の記事などが目立つ。初日の項では、野口久光氏が以下のように書いておられる。「実力、人気共に今最高といわれる歌手のエリス・レジーナと、かねてアメリカのジャズメンに多大な影響を与え、天才的な野人などと呼ばれているエルメット・パスコアールの両グループを同時に聴けるなんて、願ってもないことだからである。」「第1部がエリス、第2部がエルメットという割りぶりだった。」「さて、いよいよお待ちかねのエルメットである。『スレイブス・マス』というアメリカ吹込みのLPを聴いて、驚嘆したばかりである。現れました。あのジャケット写真通りの白髪に太いフチの眼鏡をかけたエルメットは仙人カリカリ博士（昔のドイツ映画名

作の)を思わせる。いきなりステージ前面に進み、聴衆に向かって呪文をとこなえるかのような短い早口言葉に続いてウォーと奇声をあげ、聴衆に応えさせる。それを **Call And Response** の形で段々早めていく。エルメットの意表を突いたコミュニケーション作戦に親近感をもった客席からはウォー、ウォーのかけ声がリズムカルに続く。(以下省略)」上記のようにライブの様相を熱く記載されていてすこぶる興味深い。そして、ブラジルを代表する両者の魅力を存分に示したコンサートであったと絶賛しておられた。また、最終日の項では山口弘滋氏が、「会場からは、『サダオサーン、ガンバッテ!』といった声援しきり。これは単なる激励のかけ声というより、ともすれば主役がパスコアールではないかとも受けとれるほどのエルメットの熱演に負けたくないで欲しいといった願望の声とも受け取れる。それほどに、この夜のパスコアールの熱気に満ちたプレイが際立っている。クラビネット、電気ピアノ、フルート、リコーダーと、マルチ・インストルメンタリストとしての才能をフルに発揮するパスコアールのプレイは、鬼気迫るほどの迫力にあふれている。正直いって、この夜のナベサダ・ファンの多くが、エルメットの異相と卓越した才能の毒気にあてられたのではあるまいか。(以下中略) 1部の時以上に、2部でのエルメットのバイタルなプレイが耳目をそばだたせる。本当に『サダオサーン、ガンバッテ』なのだ。アンコールでは、エルメットとナベサダが即興演奏。ことここにいたって、サダオさんも短パンツ姿でがんばったけど、エルメットのド迫力に押され気味な夜だったことは確か。』このように主役を食うほどの迫力とその演奏技術に脱帽だったことがうかがえる。同9月号ではアルバム、スレイブス・マスが大きく取り上げられていて、専門家4名の評論が載っている。その中で油井正一氏は、「最終日ナベサダとの共演など、涙が出るほどすばらしい出来であった。相互相愛がベストを出し合い、丁々発止、火花を散らす共演を生んだ。これを聴きのがした人は地団駄を踏んでいい」と彼の音楽を絶賛。この記事は私は地団駄を踏みながら読んだことが記憶に新しい。また、この号では初来日時のライブの様相が白黒写真ではあるがいくつか掲載されていて、ファンの方にはぜひとも手にしてほしい内容である。続く1979年10月号では、エルメットと渡辺貞夫氏の対談が掲載されている。その対談の中で司会をしたという竹村淳氏は、「第1部の《ブラジル・ナイト》でステージにおけるパスコアールは、ひどく無愛想で、白髪をふり乱して摩訶不思議な音世界を生み出す彼に、『白馬童子!』などという声もかかった。遠目には白馬童子と映ったかも知れないが、ステージ間近で見ていると、特異な風貌がすさまじいばかりで、むしろ歌舞伎に出てくる鏡獅子とでもいったイメージ。そのせいか、インタビューのために会うことになった時も気が重かったが、実際に会ってみると、まるで別人のようなのだ。ユーモアというより、茶目っ気がある。そして、話していると人を包んでしまうような暖かさが漂ってくる。」また、共演を果たした渡辺貞夫氏は、「最初はブラジルから来る人だし、サンバをやるミュージシャンくらいにしか思っていなかったんだ。それで彼のことを知りたくて、『スレイブス・マス』とか、フローラとやってるレコードなんかを手に入れて聴いたんだけど、もう驚いちゃってねえ。ピアノだけじゃなくて、サクソでもフルートでも、ぼくなんか太刀打ち出

来ないというか、とにかくグレートなんだね。(以下中略) それにしても、彼は素晴らしいから、彼にくっついてしばらく生活したいなと思ったぐらいなんだ。作曲や編曲もそうだけど、ピアノ、フルート、サクソ、そのほかギターも弾くしね。ぼくとしては、どうしてそういうふうに来れるのか、どうやって練習しているのか、知りたいわけだね。まあ、毎日すごく音楽的な生活をしてるから出来るんだとは思うけどね。それと、パスコアールって、とっても誠実っていうか、今度の練習なんかでも信じられないくらい協力的だったね。毎日、午後2時頃から夜の10時頃まで、いやな顔一つせず練習につきあってくれて嬉しかったね。」また、渡辺氏の「あれだけたくさん楽器を、どうやってマスターしたのかなあ。」という質問に対して、エルメートは「すべて独学なんだよ。ぼくが最初に使った楽器は竹笛で、2番目はハーモニカ・ジョイント・バイというものだった。これは、吹きながらボタンを押して音を変える楽器で、ちょっとバンドネオンに似た音色がするんだよ。もっとも、ぼくにとってのベーシックな楽器はピアノ、フルート、ソプラノ・サクソなんだけれど。」と答えている。また、スイングジャーナル11月号では、日本で紹介されるエルメートの二枚目のアルバム、調和(オリジナル盤のタイトルは *zabumbě-bum-á*) のディスクレビューが掲載されている。そこで青木啓氏がエリス・ヘジーナの夫でピアニストのセーザル・カマルゴ・マリアーノのコメントを載せておられる。「たとえば、他のアーティストが100のものを出してみせるとするとパスコアールは120も、それ以上のものを出す。常識からはみ出した大きなものを持っている」またアルバム調和の感想として「不思議な美しさに魅せられてしまった。」と書いている。また、大熊隆文氏は「やはりパスコアールは怪物であった」と激賞しておられる。

前述のスイングジャーナル誌に加えて、エルメートがインタビューを受けたのが中南米音楽誌であり、1979年9月号にその内容が記載されてる。表紙はサクソを吹くエルメートの姿が掲載されていてファンにはぜひ手にとっていただきたい一冊である。ここでは、上田力氏によってライブの評論が載せられている。「(略) だが、昨夜(7月25日、ライブ・アンダー・ザ・スカイの初日、ブラジル・ナイトの第2部)の演奏に接したぼくらの仲間や知人の印象は、必ずしも肯定的なものばかりではなかった。“ちょっと違うんじゃないか”という控えめなものから“あれは最悪だよ”という手キビシイものまでいろいろだったが、かなり肯定的な人の印象も含めて共通していると思われたのは“一方的すぎる”という意見だった(以下省略)。」また同号では、エルメートが「ぼくとしてはもっとやりたかった、時間の少ないのが残念だった」といった内容が載せられている。「“ぼくの音楽が、わかりにくいという人は確かにいる。わかりにくい、というより、どこか他の音楽とは違っているっていうんだ。自分でもそう思う。だけど、世界中にぼくと同じ人はぼくしかいないんだから。ぼくの音楽がぼくだけにしか出せない感じを持っているのは当たり前じゃないかな。”」

来日直後に出された日本盤、調和(ワーナー・パイオニア株式会社)のライナーもすこぶる興味深い。その中で上田力氏は、ライブ後の日本の聴衆たちの反応を書いておられる。

『ライブ・アンダー・ザ・スカイ ‘79』のステージでのエルメート・パスコアール・グループの演奏は、ナイーヴにフィーヴァーするブラジル・ナイトを期待していた多くの人たちに、かなり複雑な印象を与え、その反応もさまざまに分かれてしまったようだ。ブラジルのミュージシャンばかりの、いわゆる現地直送ホンモノの演奏なのにサンバのリズムがまったく聴けなかったのだから、聴き手の多くが面くらってしまったのも無理はない。おまけにフリージャズまがいのインプロヴィゼーションがふんだんに盛り込まれていたりすれば、そのへんの印象から逆算した気の早い人たちが酷評を差しむけるハメになったのもまた当然だったかもしれないのである。とても自由でユニークなことをやっているのは誰の耳にも（目にも）明らかだったはずだが、“でも、あれがブラジル音楽？”という割り切れなさは、程度の差こそあれ、おそらくほとんどの人の印象の何処かで“うずいて”いたにちがいない。」この記事を見ていると、エルメートの自由奔放で限りなくフリーな演奏と音楽に戸惑いを隠せなかった日本の聴衆たちの様子が伝わってくる。だが、続いてブラジルのベテランミュージシャンであるパウロ・モウラのコメントを紹介されている。「“ブラジル音楽の真髄は《ヨロコビ》の表現でなくちゃいけないと思う。歌って踊ってみんなが参加して、テーブルなんかひっくりかえしてハシャギまわるみたいな……。エルメートの音楽もそういう面ではまったく同じだ。いつだったか、彼がサンパウロのフェスティヴァルに出演したときなんか、いきなりバケツをたたきながら出てきて、さァこれからみんなで大騒ぎしようじゃないかって言うんだ。ブラジル音楽ってのはそういうものなんだヨ……。」このパウロ・モウラのコメントを受けて、上田氏は「さて、ここまできると、7月25日夜のあの田園コロシアムのステージでエルメートの意図していたことが、やっと判りかけてきたような気がする。モントルーのジャズ・フェスティヴァルから直行してやってきた初めての国の、初めてのステージで、エルメートが真先にコミュニケイトしたかったのは、まさにこの”みんなで騒ごう……“ということだったのではないか。」そして、アルバム、調和を高く評価し、最後に「ブラジル・ナイト」での一部の酷評が撤回されるのも時間の問題だと思いと締めくくっている。

『中南米音楽』（現在のラティーナ）1982年2月号では、ブラジルが誇る世界的パーカッショニストであるナナ・ヴァスコンセロスが、インタビューでエルメートについて語っている。「アルゼンチンでは、エルメート・パスコアールのグループと一緒にだったんだ。これは素晴らしかったね。エルメートが乗っちゃってね。6時間ぐらい、ひとりで演奏した（笑）。おしゃべりしたり、歌ったりしながら、なんでも弾いて、すごかったよ。」「劇場の人はやめさせようとしたけれど、聴衆は喜んでどんどん続けろといい、誰も帰らない。結局みんなエルメートに引っ張りまわされた。まったく、あの人は天才だよ。それに、エルメートのグループがいいね。」「とにかく、エルメートはおもしろいよ。ものすごくたくさん雑多な楽器をまわりにおいといてね。メンバーのひとりを任意につかまえて、おいキミ、この楽器をもってステージに出ていきなさい。すると、そいつはチューバをブービー鳴らしながら出ていく。それから次の人に、ハイこれを持って。すると太鼓をたたきなが

ら加わる。といった調子で、なにが起きるかわからないんだ。」

『ラティーナ』1986年3月号では、バンドOPA等を通してエルメートとの共演経験のあるウルグアイの伝説のピアニスト、ウーゴ・ファットルーソがエルメートについての興味深い話を語っている。記事は上田力氏によるものだ。「エルメートとは『スレイブス・マス』の録音の時、約2ヶ月間、同じホテルの同じ部屋で暮らしていた・・・すばらしい機会だった・・・彼が5分間語ってくれたことが、その後5年間もの勉強になっている・・・当時エルメートとやっていたことが、人間としても圧倒的な意味をもっていたのに、自分がそれほどマジメじゃなかったことが今になってスゴク恥ずかしい・・・」ジスモンチと会ったときもエルメートのことになると目を輝かせていたけれど、ウーゴもエルメートを語る時の表情は、もうどれだけ尊敬しても足りない・・・という感じだ。“朝9時ごろ起きてコーヒーを飲むと、まずフルートを午後1時くらいまで吹いてる・・・それから4時くらいまではピアノを弾き、ギターを弾き、またフルートを吹き・・・とにかく一日中、練習というか、音楽の何かをやっている・・・”なるほど、こうなるとクリストヴァン・バストスが昨夏言っていた“エルメートはたぶん、1日25時間くらい音楽をやっている・・・という表現も、あながちオーヴァーとは思えなくなってくる。”エルメートは目が悪いからストラビンスキーも読まないし、バークレーの教則本も読まない・・・結局、自分の中を見つめていくことになり、そこから出てくる彼自身の強力な個性と地方性がひとつになって、ああいう音楽になるんじゃないか・・・やっていることはすべてエルメート自身の発明だ・・・このあたりから話題はウーゴ自身のこととなって盛り上がる。“レコードをいっぱい買って、いろんな人からピアノについて学ぼうと思ったこともあったけど、この10年間は全然レコードを買っていない。エルメートのレコードなんか聴いてたら自分のピアノを捨てなくなっちゃうんじゃないかって思うし、そういう意味ではたくさんのエルメートがいる・・・自分の精神的健康を守るためにレコードは聴かないことにしてるんだ・・・”

続く1986年2月号では、上田力氏による“個人の真実”を貫いたエルメート・パスコアルの理想的なインターナショナル・ミュージック“なる興味深い項がある。「エルメートは別格だよ！普通の人間じゃない・・・たとえば、こんなコーラの瓶なんかを使っても、それをひとつの音楽にしてしまうし、ピアノはもちろん、いろんな楽器をマスターしているし・・・とにかく天才なんだ。たぶん、1日に25時間くらい音楽をやってるんじゃないか・・・”」というクリストヴァン・バストス（シモーネのバックバンドのリーダーとして1985年来日を果たす）のコメントを紹介されている。また、1979年初来日時インタビューを振り返り、以下のようなエルメートのコメントを掲載されている。「”世界に出ていきたい・・・というのが、今のぼくの気持ちだ。ぼくの音楽は世界中の人にわかってもらえるはずなんだ。だって、国や言葉が違っても音楽の心を感じるとという点ではみんな同じだと思う・・・だから世界を舞台にしたいんだ・・・”」「”ぼくの音楽に最も影響をあたえたのは、ぼくの生まれたところ・・・アラピラカ郡ラゴア・ダ・カノアの雰囲気だ“」

1993年11月発売の *Jazz Life* (立東社) では、YOKO BEKKU 氏による大変貴重なエルメートのインタビューが掲載されている。エルメートは其中で「私が生まれて初めて作った曲は、私が生まれた時の産声と、母が私を産んだ時の声とがミックスされたものだった。それが私の人生における第1番目の曲。」「そういえば、ハービー・ハンコックは瓶(ガラスビン)の音楽のアイデアをそのまま真似て、そしてアメリカでゴールド・ディスクを受賞した。私は昔、42本の瓶を使ってブラジル国内でショーをやった。でもハービーは、このアイデアでゴールド・ディスクを受賞したんだ。アメリカでね。その後アメリカに行った時、ハービーが『ぜひ家に来てくれ』って言うからアイアート・モレイラと彼の家へ行った。夕食を一緒にとった。ところが、なぜかハービーは私の前で泣き出した。彼は言っていた。アメリカで彼が何をやっても、あまりリアクションがなかった。そして私のアイデアを真似て、瓶を使って音楽を作ってみた。そしてそれがゴールド・ディスクまでとってしまい、お金を得て家を買った。彼は泣いて私に謝ったんだ。(以下省略)」「マイルスはわたしのことを『アウビーノ・ロウコ (ALBINO LOUCO)』と言っていた。私たちは精神的に愛し合っていたんだ。そして私たちは、素晴らしいオーケストラの仕事を一緒にやる予定だった。しかし、不幸にも実現できずに終わってしまった。彼は天国でオーケストラをやっていると思う。そしてあと500年もたったら、私も天国でオーケストラを聴けると思う(笑)。」

オリジナル盤が1992年に発表され、日本盤が1998年に出されたアルバム、神々の祭り(ポリグラム株式会社)の中では渡部晋也氏が興味深いライナーを書かれている。「(略)79年の来日時も、まず金物屋に行き、そこであたりかまわず叩きだしたらしい。また、ある国の税関では楽器としての子豚2匹の持ち込みで大いにもめたとか・・・ともかく様々な伝説が残っている。」

2002年の再来日に向けて、エルメート関連の作品がいくつかCD化されているのも見逃すことはできない。代表的なものがクアルテート・ノーヴォやタイグアラのアルバムである。タイグアラのアルバム、イミーラ・タイーラ・イビ・タイグアラ(東芝EMI)のライナーで、小山雅徳氏が過去のエルメートのインタビューの際のおもしろい逸話を紹介されている。「インタビュアー:『あなたに影響を与えた音楽とは?』エルメート・パスコアル:『たんぼの蛙だよ』」

2. 2002年9月の第二回来日後の資料

エルメート・パスコアルが再来日を果たしたのは、初来日から23年後の2002年9月8日。True People's Celebration という東京でのイベントに招かれてのことであった。そして、ブラジル音楽の研究者としてつとに知られるケペル木村氏がその奇跡の再来日のライブの模様を、EURO-ROCK PRESS VOL. 15号(EURO-ROCK PRESS)の中で書いておられる。「ひとくちに23年というが、どんなアーティス

トもその時から四半世紀後に活動を続けているかさえ分からない状況にもかかわらず、その間も常に世界中の音楽ファンから大きな注目を集め、シーンの先頭に厳然として存在し、精力的な音楽活動を続けているというのは並大抵のことではない。」

また、*Jazz Life* 2002年11月号（三栄書房）でもエルメートのインタビューが掲載されている。インタビューを行った渡辺晋也氏は、「そのステージでエルメート・グループはふたつの興味深いパフォーマンスを見せてくれた。ひとつはメンバー全員が持った音階の違う木靴によるアンサンブル。マラカトゥというブラジル北東部、レシーフェのリズムがベースになっている。もうひとつはメンバーが1メートル前後の長さの違う金属パイプを2本ずつ持ち、それを床（実際にはコンクリートブロック）に打ちつけて音を出してのアンサンブル。ベネズエラのアフロ系音楽で演奏される“キティプラス”というスタイルによく似たパフォーマンスだが、そのきらびやかな金属音をバックに、マウスピースについた水入りヤカンを手にしたエルメートは、それで『ラウンド・ミッドナイト』を演奏したのだ。」

現在は発行されていないが、日本におけるブラジル音楽界の重鎮ケペル木村氏が中心となり、日本のブラジル音楽発展に多大な貢献をした今や伝説のフリーペーパー、*MPB70*号（2003年5月号）（中南米音楽発行）では、2002年の来日時に通訳を務められた荒井めぐみ氏と、リオでエルメートとも演奏経験のあるミュージシャンの熊本尚美氏が、エルメート・パスコアル・イ・グループの作品、ムンド・ヴェルジ・エスペランサのディスクレビューを書かれている。荒井氏は、「昨年日本滞在中、渋谷のレストランでストロークの側面に穴を空け吹き始めてしまった。日本語の『ありがとう』という言葉にインスパイアされた曲を書き残していった。」と驚異の体験談を披露されている。また、熊本氏は、「彼の音楽は中心から外側へと広がりどんどん壊れていきそうだが、実はその内側にとっても堅い核を抱えている。いびつだけど美しい淡水真珠のよう。」と評されている。

3. 2004年11月の第三回来日後の資料

『エスクァイア』2005年1月号（*Esquire Magazine Japan Co.*）では、3度目の来日時の様子が掲載されている。この年は東京と京都の二大都市で公演が行われた。コンサートは大きく分けて二部制になっており、一部でパーカッショニストのシロ・バプティスタが、2部でエルメート・パスコアルが演奏を行った。当初は二人の鬼才の共演ということで宣伝されていたが、二人の共演はついに実現しなかった。エルメート本人に聞いたところ、シロとはやるつもりはもともとなかったそうだ。話は戻るが、エスクァイアでは、シロがエルメートについて語っている。記事はWatanabe Shigeko氏による。「両親がエルメートのファンでね、もちろん面識はあったよ。彼は現在生きている全ての世代に影響を与え続ける真の天才だよ。ブラジルではきちんと評価されていないような気がするけど、

僕も含めてね (笑)」

2006年には、エルメートと長年共演し、エルメートの一番弟子とも称されるベーシストのイチベレ・ツヴァルギ率いる、イチベレ・オルケストラ・ファミリアの「カレンダーリオ・ド・ソン」というアルバムがリリースされた。文字通り、エルメートが作曲した1年分の“音のカレンダー”の中からの曲を演奏した傑作である。ブラジル音楽への愛情がたっぷりつまった前述のフリーペーパー、MPB102号(2006年3月号)の表紙で、このアルバムが紹介されている。そこでは matsumonica 氏が「エルメート・パスコアル。彼の音楽は底抜けに楽しくて、最高に自由で、とてもファンタジック。最初の1音から極彩色の映像がドッパァ〜と広がり、あっという間に大空を駆け、アマゾンを超え、野鳥や、豚の集団、昆虫、魚たち、赤や黄色や紫の花々が次々と飛び出して・・・、そんなウキウキ、ワクワクが満載された『音の絵本』、それがエルメートの音楽。」と記載されている。私は氏のこのフレーズが、エルメートの音楽を極めて鮮明に表現されていて大好きだ。また、氏は「僕たちはバッハやベートーベンには会えないし、トム・ジョービンの新曲も聴けないが、その代わりにエルメートの新しい音楽に会える。その幸せを噛み締めたい。」と書き、ディスクレビューを締めくくっておられる。まさに絶妙のディスクレビューといえよう。

2006年春に出されたエルメートの事実上の最新作は、およそ40歳年の離れた新妻アリーニ・モレーナとのデュオアルバム、シマホン・コン・ハバドゥーラ(中南米音楽)である。その日本盤の中でケベル木村氏が「今や“ブラジル音楽界の人間国宝”と呼ぶに値する、鬼才エルメート・パスコアル」と書かれているが、非常に的を射た表現で非常におもしろい。また、「彼が100歳になった時には、一体僕らはどんな素晴らしい音楽を体験出来るのか、とても待ち通しいものである。」と書かれている。先に何度か触れたフリーペーパーMPB104号(2006年5月号)では、アルバム、シマホン・コン・ハバドゥーラのディスクレビューが記載されている。その中で、ブラジル在住経験の長いパーカッショニストで、日本におけるエルメート研究家の一人である翁長巳酉氏は、エルメートの経歴を紹介し、「1950年に一家はレシーフェに引越し、『俺よりももっと凄い才能だったんだ』というアルビーノの兄、ジョゼ・ネット・パスコアルのグループでの本格的な演奏活動が始まった。エルメートいわく『ジョゼ・ネットと俺とシブッカの3人でトリオ・アルビーノ(白子三兄弟)というグループも結成し、ライブは超大受けしていたんだ!』と、私はぜひ見たかった。」と書いておられる。

同年10月には、ワーナー時代のエルメート4部作が日本盤として再リリースされている。その中の1枚、ライヴ・イン・モントルー・ジャズ・フェスティバル(ワーナーミュージック・ジャパン)の中で、ブラジル音楽評論家として八面六臂の活躍をされている中原仁氏が、初来日時の熱い想いを書かれている。「エルメートの奇想天外で天真爛漫なライブ・パフォーマンスに狂喜乱舞したオーディエンスの一人が、当時24歳の自分だった。」

2007年8月には、エルメートが参加していた極初期の名作、コンジュント・ソン4

の日本盤（ボンバ・レコード）がリリースされた。そのライナーで、ケペル木村氏がエルメートの過去を振り返り、「‘50年代の半ば過ぎにようやくピアノと出会うが、最初の楽器がアコーディオンだったので、右手は鍵盤に馴れていたのだが、ボタンを押さえていた右手で鍵盤が弾けるようになるまで時間がかかったというのはいかにもエルメートらしいエピソードだ。」と興味深い逸話を紹介されている。

このように、エルメートの過去の貴重盤をはじめ、多くの作品がここ日本において現在リイシュー、紹介されていることは大変喜ばしいことである。

終わりに

音楽ファンにとって、リアルタイムでアーティストの情報を得ることほど心躍る時はないであろう。今回使わせていただいた資料を見ていると、自分がその時代に居合わせてその音楽やアーティストを生で体感できていたらと、叶わぬ思いが幾度も脳裏を霞めたものだ。と同時に、これらのすばらしい資料が過去の物として、再び読者に読まれることなく放擲されることほど悲しいことはないと思った。一つひとつの論考やエッセイには著者それぞれの熱い思いが込められている。エルメート・パスコアルに関する資料だけでも1冊の本にまとめられそうなほどである。これらの貴重な遺産をなんとか音楽ファンに伝えられないかと考えたのが、今回のエッセイを執筆する動機となった。拙稿をお読みくださった方々に過去の評論家の先生方の熱い思いに触れていただけたら、これほどの喜びはない。興味がおありの資料は、ぜひとも古本屋でお探しになって欲しい。紙面ながらこの場をお借りして、ここに掲出した評論家の先生方、出版社各位に対して、深甚なるお礼と感謝の意を表させていただきます。

2008年9月29日

青木 義道